

---

# 3人の最強な子供、来る！！

海記 龍

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

3人の最強な子供、来る！！

### 【Nコード】

N5125Q

### 【作者名】

海記 龍

### 【あらすじ】

タイトル通り、3人の子供が転生してきて、原作の中で暴れます。注意・現在、志希が別の世界いつてます。他の2人のうち1人もどつかの世界行く予定です。いずれクロスオーバーになるかもしれません。よろしくお願いします。

**説明&プロフィール、来る！（前書き）**

二作目です。

今回はやりたかったりポーン！

これもがんばりますのでよろしくお願いします。

## 説明&プロフィール、来る！

別に読みとばしてもいい説明

この小説の登場人物は僕の一作目の方に出てくる人もいます。多少は違いますが他は一緒です。ですが、知っている人も分けて考えて下さい。これはそっちの平行ワールド（違うマンガ）というような感じですので、よろしくお願いします。  
は3人のプロフィールです。

### プロフィール

名・川中志希<sup>あし</sup>

性別・女

年齢・14歳

身長・165cm

体重・「何書こうとしてんだ？」

容姿・髪・黒髪でストレートで肩にとどくくらい

顔・中性的、たまに男に間違えられる

体・やせているしバランスいい

性格・仲間には優しい、敵は徹底的に排除

一人称・『オレ』

名・火野暁<sup>あき</sup>

性別・女

年齢・14歳

身長・162cm

体重・？（本人曰く「測る日は休んでる」）

容姿・髪・黒に少し茶色、毛先が外側にはねてる、肩にとどくくらい

顔・眼鏡をかけている、男にしか見えない

体・モデル並み

性格・誰にでも優しい。

一人称・『オレ』

名・二宮和かず

性別・女

年齢・14歳

身長・157cm

体重・38kg

容姿・髪・黒髪、ストレート、かなり長くて背中まである

顔・いつも笑ってる、かわいい

体・身長が低いのを気にしている、それなりにいい

性格・大和撫子、戦うときは男みたいになる

特徴・常に敬語

一人称・『私』（怒ったときも変わらず）

・志希と暁は武器が超能力で、物を動かしたり瞬間移動したりします。

・和の武器は薙刀なぎなたです。

志希&暁&和、来る！（前書き）

がんばるとかいったのに2話目がこんなに遅くなったよ！

## 志希&暁&和、来る！

オレは川中志希しき。この小説は、作者の気が変わらない限り、多分オレ視点、で書く。らしい。

まずあいさつから。

名前はさっき言ったよな。

めんどい。(柿ピーみたいな)

オレのプロフィールは最初の話を読んでくれ。

「…おい志希、どうした？」

「へ？」

「急に止まって…。どうかしたのですか？」

「なんでもないって！ 大丈夫だ！」

せっかくだしこいつらの紹介もする。

最初の奴は火野暁きょう。ちゃんとした女。だが男にしか見えないので、中学は男物、それ以外でも男物しか着ない。スカートなどもってのほかかって奴。まあ、それは俺も同じだが。

次の敬語の奴は、二宮和かず。こいつももちろん女。だが、俺らみたいに男っぽくはない。髪も長いし。なんでこんなに違うのに親友なんだ？ あ、こいつの家は薙刀の道場をやっている。だが門下生はいない。当たり前、この時代に薙刀なんていない。

こいつらのことも、詳しくは最初の話。

和「そうですね、ならいいのですが。」

暁「とりあえず、早く家帰ろうぜ。」

志「ああ。じゃあな。」

暁・和「「また明日。」」

なんかこんな感じだ。



志希&暁&和、来る！（後書き）

時間がないです。なので結構短いです。

死&神、来る！（前書き）

今回は、いよいよ転生する！  
…かも。させる。

## 死&神、来る！

次の朝。

オレは群れるのが嫌いだ。雲雀さんに影響を受けた。他には柿ピーとか柿ピーとかツナとか。

関係ないが、風紀委員って学校で一番群れてると思うのに、なんで雲雀さんはその委員長なんだろう。ささやか過ぎる疑問だ。話を戻して。

学校には、家の路地とか屋根の上とかを通っている。

……はい、その人、なんでオレが屋根の上を通れるか、？ だろ。

答えよう！

それは、家で訓練されたから。何かと便利だぜ、通る屋根の家の人には許可とってあるし。

で、また戻る。

屋根の上を通っているのは、オレだけではない。暁や和も同じで、途中で合流してから学校へ向かう。

今も、合流する前。視界にはもう2人が見えている。

志「チエツ、今日は3位か。よりによって暁に負けたぜ！」

暁「大丈夫だって、オレも今来たところだ。今日の1位は和だな。」

志「おおっつ！」

和「そんなにすごいことではありませんよ。早く起きて早く準備して早く出ればいいのです。志希も暁も楽でしょう？」

志・暁（「いや、俺らにとってはムズイから。」）

志「早く行こうぜ。」

暁「ああ。」

和「そうですね。」

そして俺たちはほかの奴らには見えないだろうスピードで屋根の上を駆けた。

志・暁「ついたーっ！」

毎日毎日同じ。同じ。同じ。

同じ過ぎてつまらない。

暁「志希、和、早く行こうぜ。」

志「ああ。」

和「はい。」

この3人でREBORNの世界へ行きたいぜ…。トリップでも転生でも。でも、んなことあるわけねえよなあ。

？『その願い、叶えてやる。転生の方な。3人一緒に校門の外の道路に飛び出してみる。車にひかれるぞ。少し痛いけど、それも一瞬だ。』

ん、なんだこれ…？ 2人の方を見ると、あいつらも頭をかかえてきよるきよるしている。頭は痛くないが。

志「なあ、今の声、聞いたか？」

和「はい。頭の中に響いてくるようだったので、声ではありません。そして、普通の人間ではできません。」

暁「そうだよな。それに、REBORNの世界に行けるなら、ちょっとやってみねえか？ ダメでもともと、さ。」

志「そうだな、いつてみるか。和はどうだ？」

和「そうですね、いつてみたいと思います。戦闘力もこの3人にはありますし、もし戦うことになっても大丈夫でしょう。」

志・暁「「そうか。戦闘もあるのか。」」

なんか、今日、よく暁と声がハモるな。いや、全く関係がないが。

志「じゃー行くぜ。」

暁・和「「おー！」」

さて、今、校門前だ。

志「いけるよな？」

暁「いけるだろう。」

和「いけますよ。」

道路、出てみた。

後ろから先生が叫んでいるが何も聞こえない。

そこに、向こうから車…というかトラックが来た。でかつ！

ドッカーン！

(あれ、音違くない？ 作者の奴…。)

暁「ほんとに…、い、けん、の、か…？　一瞬、とか、いったのに、ま、まだいてーんだが…。」

志「鍛え方が足りねえ。オレなんか血は出てるがピンピンしてるぞ。」

和「おふたり、先生や児童の皆さんが来たので黙った方がいいですよ。」

志・暁「はい…。」

そこで意識は途切れた。死んだんだろうな。

…でも、ほんとにREBORNの世界に行けるのか？

ガバツ

志「うおっ!?!」

？「よー、やっと起きたか。ほかの2人はとっくに起きてるぜ。」

志「誰？　だ、コノヤロー！」

暁「神だつて。」

志「ふーん、神ねえ……。……へ？ 神？ あの？」

和「たぶん、その志希が思い浮かべてる神ですよ。」

？「オレは神。名前は、ユウだ。ちなみに女。」

志・暁・和「……女！！？」「……」

ユ「そんなに驚くなつて。お前らみたいなもんだよ、志希、暁。それに、神といえば男つてイメージ、人間にはあるだろ？ それを壊すために、女の神候補の中でも有能だったオレが神になったつてワケ。」

志「あ、そ。で、REBORNの世界はまだかよ？」

ユ「ああ、今すぐ行くか？」

志・暁「もちろん！」「」

和「私はいつでもいいですが。」

ユ「じゃ、そつちに飛ばすから。オレにつかまってる。」

志・暁・和「……はい。」「……」

ビューン

そして俺はREBORNの世界に行った。んだろっ、たぶん。

死&神、来る！（後書き）

よし、できた。  
今回長かった。



**家庭教師&次期10代目候補、来る！（前書き）**

今回から、だいたい2人〜3人ぐらいずつ登場させたいと思います。

家庭教師&次期10代目候補、来る！

ドシン！

志「おいこらユウ、衝撃無くせなかったのかよ？」

ユ「あーわりい、忘れてた。」

志・暁「忘れてた…だと!？」

ユ「お、おい、どうした…？(すげーやな予感がするんですけど！?)」

志「お前は神だからいいだろうけどな、俺らにとっちや痛いんだこのバカマヌケ！」

暁「なあ、殴つてもいいんだろ？ 神だし。」

和「そうですね、神ですから痛くないでしょう?」

志「殺<sup>や</sup>ろうぜ。」

ユ「え、ちょ、ちょっと待て、神でも痛いもんは痛い…ぎやあああ  
っ!!!!!!!!!!!!!!」

ユ「すみませんでした。」

志「よし。」

暁「そうだな。」

和「分かればいいのですよ。」

今後この三人は怒らせないようにしよう。  
そう心に誓った神ユウだった。

? 「あ、あの、すみません、通らせていただけませんか…?」  
? 「お前ら、通行の邪魔だぞ。」

志・暁・和「ユウユウえ?」

? 「(見事に声がそろった…。) (すぐそこが家なんですけど…。)」  
なんと。

オレらはツナの家の前に着ていた。(なんとという偶然!)  
あとでユウに聞いたのだが、落ちる場所は神でも分からなくてい  
る奇跡だったらしい。

で、今のはツナとリポーン。リポーンって殺し屋ヒットマンなのに普通に顔出  
してしゃべってるよな。

和「あ、申し訳ございません。志希、暁、ユウさん、早く横にどい  
てください。」

志・暁・和「ユウはい。」  
ツ「ありがとうございます。じゃ、じゃあ。」  
リ「ちやお。」

志・暁・和「「「ちやお。」」

ユ「さて、お前らはみんな別々の場所へいつてもらう。」

なんかユウが急にしゃべりだした。暁と和の2人は真剣に聞いている。

ユ「和は雲雀の家だ。この世界では和は雲雀の義妹だからな。暁は笹川の家。いとこってことになってるから。んで、志希はここ。ツナの家だ。生き別れた双子の姉。二卵生だから似てない。家光がどこかへ連れて行ったってことになってる。」

志「おいちよつと待て。」

ユ「へ？ なんだ。」

志「オレとツナが生き別れた双子ってのはなんだ！ 全く似てないぞ！」

暁「オレ、了平のいところでもあるのか…？ 京子はともかく。」  
和「雲雀さんといえば、和室の家ですよ。私はいいですよ。」

ユ「だぁー！ ー！ ー！ つ、うるさい！ もうその設定で生まれたってことになってるからな！？ 早く行って来い！ 日が暮れる！ 特殊能力とかほしいならやるから！」

志「マジか？ じゃあ、どんな毒にも耐えられる力と、すげえ精神力、最強の戦闘力、集中力。ほかに欲しくなったらお前呼ぶから。」  
暁「オレも志希と同じやつ。」

和「私も。」

ユ「はいはい。じゃあ、ちよつと目を瞑ってる。」

俺は言われたとおり、目をとじた。ぼんやりと、少し光っているの  
がわかる。

ユ『はい、これで完了だ。俺を呼ぶには心で念じる。』

志・暁・和「「「はい。「「「

暁「じゃーな。」

和「では、また。」

志「ああ、また並中でな！」

そして俺らは三つの方向に散った。

暁の場合

ピンポン

京「はい…、どちら様ですか？」

暁「(ウソっぽいきけどやるしか…) 暁だよ、暁！ 火野暁だ！ いとこの！」

京「えっ、暁ちゃん！？ ちょっとまってて、お兄ちゃん、暁ちゃんが来たよ！」

了「何だと！？」

暁(本当だったのかよ…。)

和の場合

ピンポン

雲「だれだい？」

和「二宮和です。」

雲「！ ああ、君が、今日から僕の妹になるっていう和か。まあ入りなよ。」

和「ありがとうございます。（意外とあっさり。）」

**家庭教師&次期10代目候補、来る！（後書き）**

志希の場合は次回。遅刻しそうなのでね！

沢田家&奈々ママン、来る！（前書き）

サブタイトルは家とかでもいいってことで。

注意・まだリボンが家に来た直後ぐらい。



沢田家&奈々マママン、来る！

志希の場合

ピンポーン

ツ「はい…！ さっきの…。」

志「よ、ツナ。」

ツ「え！！？（誰、この人…。なんでオレの名前知ってんのっ…！  
！）」

志「覚えてねーかな？」

ツ「え？ っていつかどちら様ですか…？」

志「志希だよ！ やっぱ覚えてねーのか…。母さん呼んでくんね？」

ツ「え、はあ…。母さん、ちょっと来てー。」

奈「はい。あら、この子…。」

ツ「母さん知ってる？」

奈「知ってるも何も、ツツ君のお姉さんじゃない。」

ツ「えええええつつつつつつつ！！！！！！！！！！？」

志「久しぶり、母さん。」

奈「ほんと、10年ぶりかしら、おっきくなつたわねえ。」

ツ（ええーっ、俺全く記憶ないよ！）

志「しょうがねーよ、ツナ。オレが連れて行かれたの、2人が4歳のころだったし。」

ツ「あつ……。あれ、2人？」

志「ああ、オレたち双子なんだぜ？ 二卵生だからマジ似てねえけど。」

ツ「えええええーっ！！？ 双子ーっ！！？（似てないからそれだけは選択肢になかったよ！）」

奈「そうよ、ツつ君。さあさあ志希ちゃん、早く入って！ ツナの家庭教師の人にもあいさつよ！」

志「家庭教師？ ツナに？（よっしやリボンだ！）」

沢田家&奈々ママン、来る！（後書き）

区切り悪くて申し訳ありませんでしたっ！！

並盛中&持田先輩との戦い、来る！（前書き）

今回は、志希たちが並中へ！  
っていうか、ツナと志希が双子って無理あるな。

並盛中&持田先輩との戦い、来る！

リ「よろしくな志希。俺はリポーンだ。」

オレの部屋が用意されるまで、ツナの部屋にすることにした。  
んで、一応、リポーンが自己紹介。

志「よろしくなりポーン！ っていうか、ツナに家庭教師がつかないでな。しかも赤ん坊！ リポーンすげーな。」

リ「！ そうか。ありがとな。」

いいタイミングだ。お前らに言っとかなくちゃいけねーな。」

俺は、ボンゴレファミリーのボス・ボンゴレ9世の依頼で、お前をマフィアのボスに教育するために日本へ来た。」

志「……ワオ、おもしろそうじゃん。ツナ、ガンバ！ 俺も陰で応援するぜ！」

ツ「志希、何いってんだよ……。なんでそんなむちゃくちゃな。」

奈「志希ちゃん、部屋、準備できたわよ。」

志「（このすげーいいタイミングで……。）分かった、今行く！」

じゃな、ツナ。リポーンがあとでまだなんか話すんなら、明日聞かせろよ！」

リ「わかったぞ。」

ツ「おやすみ〜。」

バタン！

志（やべ、思いっきり閉めちゃった。）

奈「志希ちゃん、部屋はこっち。ツッ君の隣の部屋よ。」

志「はい。ありがとう。」

奈「そうそう、明日から、ツッ君と同じ並盛中に通ってね。手続きはもうしてあるから。1のAよ。」

志「了解っす！」

奈「フフ、おやすみ。」

志「おやすみなさい。」

部屋の中で志希は。

志「今日がりボーンが来た日だとすると、明日は持田先輩と戦う…  
だな。オレも暴れてみるかと。さっさと寝る。」

んで寝た。

次の日。

今日は並中に行くの初なので、ツナと一緒に行った。そんな時から顔青ざめてたけど、うん、オレは知らないことになってるから。

ツナ、これからのこと、大切な第一歩になるぜ。

持田先輩ってホントに強いんだろーか。死ぬ気ツナに負けるって弱すぎね？

校門に着いた。

あつ、ツナは、今日はオレと一緒になので遅刻じゃない。

志「ありがとなー、ツナ。職員室ってどこだ？」

ツ「ああ…、あっちだよ。」

志「あんがと。じゃ、先行っててくれ。オレも同じクラスらしいから。」

ツ「え！ほんと！わかった。早く来てね。」

志「おうー！」

職員室に着いて、まずはあいさつか…と思いやってみた。

志「すいませーん、今日から転校してきた、川中志希でーす。沢田でもいーんすけど。」

先「お、君か。こつちには川中となっているから、川中志希でいいよ。まだ早いから、校内を回ってみなさい。」

志「はい。（持田先輩の対決だから、後で体育館いこ。）」

体育館の前に、やっぱここだろ！

志「応接室ー！！こつてもう雲雀が使ってんのかな…？」

？「ここに何か用？」

！……！！……！！……！！……！！……！！……！！

志「えーつと…どなたですか。」

？「ワオ、僕を知らないのかい？」



志「（いや知ってるけども。）あ、オレ、今日転校してきました川中志希です！」

雲「転校生？ じゃあ知らないか。僕は雲雀恭弥。並盛中風紀委員長。群れているのが嫌いだ。」

志「雲雀恭弥：恭弥か！！ 噂に聞く！」

恭「：怖くないの？」

志「全く。」

恭「：ふうん、君、面白いね。気にいったよ。風紀委員に入らないかい？」

志「断る。じゃ、オレ用があるんで。」

ダダダッ

残された雲雀はというと。

恭「あの子珍しいな……。戦ってみたい。」

……不穏な空気。

やってきました体育館！ テンションも上がる上がる！

志「やっぱり多いな、生徒が。おっ、始まるか。」

志希はとりあえず一番よく見える前の列に行った。

持「お前のようなこの世のクズは、神が見逃そうがこの持田が許さん！！」

成敗してやる！！！！」

志「（神が見逃すならお前も見逃せよ。）おい、ちょっと待てよ。誰がこの世のクズだ？」

持「お前誰だ？」

志「ツナの姉。人間クズなんて…あ、いるか。お前みてーな自己中心的で思い通りにならなきゃ気が済まねえ子供みてーな奴だ。」

暁「そーだ。オレはお前みてーなやつより、ツナのような優しい奴の方がいい！」

和「そうです。あなたのような人がこの世に生きているとは、この世界どうなっているのでしょうか？」

志「暁！ 和！ お前らもか！」

持「何っ…。まあいい、沢田、貴様は剣道初心者。そこで十分間に一本でもオレから取れば貴様の勝ち！出来なければオレの勝ちとする！

賞品はもちろん、

笹川京子だ！！！！」

京「しよ、賞品！！？」

花「最低の男ね。」

暁「だよな、京子。大丈夫だ、持田みてーな奴にお前は渡さねーよ。」

京「暁ちゃん…。ありがとう。」

暁「ま、ここはツナと志希に任せよーぜ。」

京「うん！」

持「む？ 沢田は？」

生1「トイレに行きたいというので行かせました。」

生2「逃げたな…、あいつ、トイレ逃走エスケープ多いから。」

持「何だと…！　これで不戦勝だ！！　京子はオレのモノ！！」

志「おい待て、お前みたいなやつに渡すか！！　ツナが来るまで、待ってる。」

持「沢田は来ないぞ。オレに恐れをなして逃げたんだ。」

志「んなわけないだろ？　あいつは、子犬にも勝てねーんだ。というか、勝つ気がない。お前なんて、今までにあった戦いの一つにしかならねーんだよ。お前の弱さからな。」

持「オレが弱いだと!?!」

志「そうだ、せいぜい強いといつても、この学校だけだ。お前以上の強い奴なんか、この世界に山がいくつもできるくらいいるんだよ！　何なら世界中放浪してケンカしてきてみる。お前は一日でボロボロだ。」

持「…うるさい！　沢田は来ない！　オレの勝ちだ！！」

うおおおおおおおっつ！！！！

志「…いや、来たようだぜ？」

持「なにっ!?!」

では今からオレの解説！

ツ「いざ……! 勝負……!……!」

うおおおおおおおおおおおっっ……!……!……!……!……!……!……!……!……!……!……!」

ツナは防具もつけずに持田へ向かっていく。

持「ぶっ、裸で向かってくるとは……! バカの極みだな……!……!  
手加減するとも思ったか……! 散れ、カスが……!……!」

志（大人げない……。カスっていうのはXANXUSしか言っちゃい  
けねーんだよっ。）

持田の振り下ろした竹刀がツナの顔に直撃する。

が、ツナはそのまま持田に頭突き……!  
生徒たち、全員びっくり。固まっている。

ツ「ふんっ……!」

倒れた持田の上にツナが飛び降りる。

上に上げた手は手刀。全員が面を打つと思っているが、それは違う。

ツ「うおおおおっ……!……!」

持「ぎゃっ……!」

ツナは持田の髪の毛を額の辺だけ抜いた。

それでは足りなかったようで、ついにはすべての髪を抜いてしまった。

ツ「全部本」

審判「赤……!……!」

生「旗が…上がった…」

シューウ…

死ぬ気モードが解けたようだ。

ツ「はっ!!!」

生「スゲエ!! 勝ちやがった!!!!!」

ツ「俺が…やったの…?」

志「そうだぜツナ! よくやった!」

ツ「志希!」

志「おっ、ずっと見てた。よく頑張ったな。」

ツ「ありがとう。」

解説モード終わり。

京「ツナ君。」

志（おっ、京子だ。）

京「昨日は怖くなって逃げ出してごめんね。」

ツ「えっ、いや、えと、あの…」

京「あたし、よく友達に笑う場所分かってないって言われるの。」

ツ（冗談だと思われてるー！）

志（せっかく死ぬ気になって告白したのに…。ツナ、ドンマイ。）

京「ツナ君ってすごいんだね！ただ者じゃないって感じ！」

志「よかったな、ツナ。」

ツ「うん。」

並盛中&持田先輩との戦い、来る！（後書き）

次はこのその後でも書こう。



初戦終えたツナ、来る！（前書き）

サブタイトルすいません。考えられないんだよねー。  
今回はものすごく短くなる予定。

初戦終えたツナ、来る！

その日、学校から帰って来る途中のツナは機嫌がよかった。  
ま、京子ちゃん関係だよな。絶対。

ツ「やったぜリボーン！ 京子ちゃんと友達になったーっ！！」

リボーンがいるはずの、2階の自分の部屋に飛び込む。

ツ「あれ？」

志「リボーンは…っど。」

ちよつと見つからなかった。つーかツナのベッドで寝てたぞリボ  
ーンの奴！！

ツ「おつ、なんだいるじゃないか。なあ、リボーン！」

志「あつ、ちよつと待てツナっ……………ああ……………」

リボーンのところに行って、足元の線……………っつーかワイヤー  
？ に足ひっかけて手榴弾のピンが外れた…。あーあ、ご愁傷さま。  
オレは自分の部屋に逃げるぜ！

志「じゃあツナ、死ぬなよ！」

ツ「しまっ……………！！ てか、死ぬなって、えーっ！！」

少しでも被害を少なくするために（まあ意味なさそうだが）、ドア

を閉めて、隣の自分の部屋に逃げる。  
そして、すぐにツナの悲鳴とともに、

ドガーーン!!!!!!!!!!!!!!

と大爆発。

窓から見ていたけど、リボーンは『R』と書かれたパラシュートを使っ  
て空へ。まだ眠っている。

ツナの部屋に戻ると、ツナがマフィアにならないと言っていた。物  
語が進まないからマフィアになれよ！。

初戦終えたツナ、来る！（後書き）

次は昨日、志希がいなくなっってからリボンとツナが話したことを志希は知ってるんだけど。暁とか和とか久しぶりに登場させようかな？

マフィアの真実、来る！（前書き）

大げさすぎたかも shouldn't.

そういえば、いちばん最初に死ぬ気になったの、書いてないや。

この話では書かないので。すみません。

マフィアの真実、来る！

マフィアのボス ……

裏社会に君臨する闇の支配者

何人もの信頼できる部下を片手で動かす  
ファミリーのためなら自らの命をはることもいとわない

彼の周りには信望と尊敬の念がとりまき  
スラムの少年はヒーローと崇めたてる…

リ「へえ、そうなのか。」

ツナの頭に銃口を向けてリボーンは言う。  
お前もマフィアだろーが…。

ツ「お前が無理矢理読ませてんだろー!!」

リ「毎朝読めよ。お前はファミリーの10代目ボスになる男なんだ  
からな。」

ツ「冗談じゃないよ!? マフィアのボスになんて絶対なるもんか  
! 志希もなんか言っちゃってよ!」

志「ん〜、……………ツナ、リボーンに従っとけ!」

ツ「志希まで……!!?!?」

リ「心配いらねーぞ、後はこっちで勝手にやるから。志希、手伝え。」

志「おう。」

リ「この辺の奴ふいてくれ。どっかいじるなよ。」

志「了解。」

キュツキュツ

なんかリポーンに頼まれたんで、銃をふいている。今は一般人のオレにやらせるとか、リポーン何考えてんだ？

キュツキュツ

ツ「めっちゃめっちゃ心配だよ!!!」

志「ナイスツツコミー。でも早く行かなくていいのか？ 学校遅れんぞ。」

ツ「わわっ、ほんとだ！ あれ、志希はいいの？」

志「今日オレ遅れて行く。母さんに言ってるから大丈夫。昨日聞けなかった奴をリポーンに聞こうと思ってな。」

ツ「（それだけで…。）そ、そう。じゃー行ってきまーす。」

ボタン！

志「じゃ、リボーン。まず、昨日外で見た、なんか頭から炎だして  
てパンツ一丁だったあれは何やったんだ？」

リ「あれは死ぬ気弾を打ったんだ。」

志「死ぬ気弾？」

リ「死ぬ気弾はボンゴレファミリーに伝わる秘弾だ。これで脳天を  
打たれたものは一度死んでから死ぬ気になって生き返る。」

志「絶対に生き返るのか？」

リ「いや。死ぬ気になる内容は、死んだとき後悔したことだ。」

志「後悔しなかったら？（わくわく）」

リ「オレは殺し屋だぞ。」

ブイツ

志「あ、そ。死ぬんかい。」

リ「死ぬ気っていうのは、体中の安全装置をとっばらった状態なん  
だ。だからギリギリまで命をけずる代わりに、すごい力を発揮する  
ことができるんだぞ。」

志「じゃあ、腹にナイフぶっ刺したら死ぬか？」



リ「さーな。やってみたことねーな。」

志「残念だな…。あ、ボンゴレファミリーとか言ってたけど、なんでツナに関係するんだ？」

リ「ボンゴレ9世は高齢ということもあり、ボスの座を10代目に引き渡すつもりだったんだ。」

だが10代目最有力のエンリコ抗争の中撃された。」

リボーンは写真を見せてくれた。頭を撃ち抜かれて倒れているエンリコだ。

リ「若手？2のマツシーモは沈められ、」

海に沈んでいるマツシーモ。自分の体重のせいじゃねこれ。

リ「秘蔵っ子のフェデリコはいつの間にか骨に。」

頭蓋骨やほかの骨が落ちている写真。フェデリコの原形ほとんど留めてねーな。顔分かんねーじゃん。

リ「そんで、10代目候補として残ったのがツナだけになっちゃったんだ。」

志「なんでだ？ 関係ないだろ。」

リ「ボンゴレファミリーの初代ボスは、早々に引退し日本に渡ったんだ。」

それが志希とツナのひいひいひいじいさんだ。

つまりツナは、ボンゴレファミリーの血を受け継ぐれっきとしたボス候補なんだ。

お前もだが、男子がいる場合はそっちが優先だからな。お前は守護者と同等だ。」

志「へ〜。なんかオレ、女子に生まれたせいで損した？」

リ「お前がマフィアになりたくて、ツナがなりたくないって言うても、結果はかわらねーぞ。ま、志希、お前も俺の教育を受けてもらうがな。」

志「へーい。じゃ、オレ学校行くから。リボンも行くか？」

リ「ああ。」

そしてオレらは並盛中へ向かった。昨日、まともに紹介してねーしな。

志「おっ、あれ暁と和じゃん！　おーい！ー！」

暁「！　志希じゃねーか！　和、志希がいんぞー！」

和「あら！　偶然ですね。志希も学校へ？」

志「ああ。お前らもだろ？　一緒に行こうぜ。」

暁「ああ。で、そいつは？（知ってるけどな）」

志「こいつは、ツナとオレの家庭教師のリボンだ。マフィアなんだと。」

和「あら、すごいですね。」

暁「ふーん、いいな。オレんところにもリボン来てほしいな、かつこいーじゃん。」

リ「気が向いたら行ってやるぞ。」

暁「おつ、あんがと。」

和「はいはい、みなさん。着きましたよ。」

志「…なー、めんどくなつた。」

リ「ダメだ。ちゃんと行け。」

志「へーい。」

マフィアの真実、来る！（後書き）

ふう。疲れたぜ…。

なんか会話文ばっかになってしまっ…。

感想とか意見とかよろしくお願いします！！

**バレー&新たな弾、来る！（前書き）**

サブタイトル考えらんない。

久々の更新ですいません。前更新したの一月ぐらい前だ…。

## バレー & 新たな弾、来る！

オレたちが学校へ行くと、リボーンはいつの間にかいなくなっていて、代わりにツナがリボーンを探して出てきた。

志「よつすツナ。何やってんだ？」

ツ「あー、志希！ ……その2人は？」

暁「オレは火野暁。笹川兄妹のいとこだ！」

ツ「え！？ 京子ちゃん！？ ……つてか兄弟って誰…？」

和「いずれ分かります。私は二宮和。」

ツ「へーっ…。志希、いつの間にこんなに友達できたんだ？ ……つか、オレの学年なのに知らない奴がいるなんて…。全員知ってたつもりだったのに。」

志「こいつらも転校生だからな。1のAの。」

ツ「ほんと！？ ……あ、やばっ忘れてた、リボーンだ！ 志希！ リボーン知らない！？」

志「さっきまでいたんだがな…、どっかいつちまった。」

ツ「えー、どこ行ってんだよ、こんな時に限って…。」

そんなとき、本当は消火器とか入ってるはずのもの、これ名前なん

だっけ？ その中から怪しいにおいが。ツナも気付いた。

ツ「何だ？ このにおい？」

ツナが耳を近づけると、コポコポコポ…と音がする。そして急に開いてツナに直撃…プツ、わりいツナ、笑っちゃったツ…。

…あれ、出血してね？

…うん、骸の幻覚だなよーしそうだなー。(手当てがめんどい。)

中からリボーンが！

リ「ちやおっす。」

ツ「ありえね よー!」

即座にツナがツッコんだ理由！ それは、リボーンが中にいて怪しい実験っぽいので内装がものすげー綺麗だったから…じゃないか？

リ「オレのアジトは学校中にはりめぐらされてる。」

ツ「いつの間にそんなことしてんだよ！」

ツッコミスル上がりまくってんじゃねーか。違った成長してるぞツナー。

ツ「はっ、それより、死ぬ気弾撃ってくれよ！ 時間がないんだ！

「！」

リ「撃つてもいいけど死ぬぞ。」

はつきり言ったな。

ツ「へ！？」

ツナは分かっているみたいだな。

志「オレが説明してやる！！」

死ぬ気弾は撃たれたときに後悔がないと復活しねーんだ。

そんなうかれてるツナに後悔なんてねーだろ？」

ツ「あつ、そつか！　じ…じゃあ、死ぬ気弾使用不能…！！？」

後悔作れば死なねーんだが…、そう簡単に作れねーか。

リ「いつちよ試してみるか？」

ツ「いやいい！！　やっぱいいから！！」

リ「んじゃ頑張れよヒーロー。」

志「さてツナ、こんなことになった訳を話せ。」

ツ「えーっと、男子にバレー出てほしいって頼まれて、死ぬ気弾があるからって受けて、リボーンに撃ってもらおうと思って探してま



した。」

志・暁・和「……バカ？」

ツ「ひどっ。どーしよー、せっかくダメツナって言われなくなったのに、試合でダメぶりをさらしたら逆戻りだ…もう帰るしかないよ…。」

暁「おっ京子！」

ツ「え！？」

暁の一言でツナはしっかり立った。京子すげー。

京「あれっ、暁ちゃんにツナ君！ ツナ君、バレー出るんでしょ？

会場あっちだよ、早くしないと始まっちゃっよ。」

志「さーツナ行くか！。」

京「え…？ 誰ですか？」

志「オレは川中志希。ツナの双子の姉だ。暁の親友でもある！ よろしくな。」

和「私は二宮和。同じく暁の親友です。よろしくお願いします。」

京「よろしく！ ほら、ツナ君早く！ みんな待ってるよ。」

ツ「う…うん。」

ツナはぐいぐい引つ張られていく。いがいに京子スゲエ。

志「あれ、リボーンはいいのか？」

リ「ああ、ちょっとな。」ニヤッ

志「そーか、アレか。」そ、オレもついてく。暁、和、行っててくれ。」

暁「分かった。」

和「分かりました。」

リポーンは外へ出て、水道のところへいった。  
そしてナイスタイミング！ でツナも来た。

水で顔を洗っている。

リ「帰んねーのか？」

ツ「ああ。じゃあな。」

リ「あばよ。」

…リポーン先読んでたのか？ オレはマンガ読んでたから分かるけど、計算済みだったっつーことか？

リ「志希、行くぞ。」

志「ん？ ああ。」

リポーンとオレは、体育館へ入った。こっそりだったし、ほとんど全員ツナを見ていたから気付かれていない。そして、上の通路へ通じる道を行った。

そこから見えるツナは決意の顔をしている。

リ「わかればよし。くらえ!!」

…やっぱり撃ったー!!

下から「つぎやっ!」というツナの声が聞こえる。

志「…死ぬ気になんねーな、違う弾か?」

リ「いや、同じ弾だぞ。」

志「マジか!」

リ「ああ。」

「ここからは私、和がお送りします」

男子「くるぞツナ! ブロック!」

ツ「オツケー!!」

そしてツナさんは、ジャンプして驚かれました。理由は、高さがかすごかったからです。ネットなんて軽く超えてました。

「ジャックすんな和! あらすいません。ここからは今まで通り

オレだ！〜

この騒ぎが終わって教室に。

オレ達は昨日指定された席に座った。うっしやツナと暁と和の近くだぜ！ 全員近いな。

それを周りの奴らが不審に思ったらしく、先生に報告。

生1「先生、知らない奴がいます！」

先「ああ、その3人は、昨日転校してきたんだ。昨日の騒ぎに乗って帰ってしまったから紹介していないが。」

おっし自己紹介してやろう！ と思って3人とも前に出た。

志「オレは川中志希！ オレとか言ってるし制服も男物だが女だ！  
これからよろしく！」

暁「オレは火野暁、オレも志希と同じ女だ。よろしく。」

和「二宮和と申します。これからよろしくお願いします。」

そして席へ戻る。また退屈な一日の始まりだ

！！



バレー&新たな弾、来る！（後書き）

時間がないので区切り悪いけどここまでです、読んでくださってありがとうございます！

スモークン・ボム、来る！（前書き）

わお。どんだけ更新してないんだ。  
ってかこれって詳しくすぎる気がするんだ、他の人の見てると。



スモーキン・ボム、来る！

家へ帰ってから、ツナはリボーンにバレーで撃った弾のこと聞いた。

「ジャンプ弾……!!?」

「?死ぬ気弾?ってのは、ボンゴレファミリーに伝わる特殊弾が脳天に被弾した時の俗称にすぎない。」

……うん、めんどいんで省略。

次の日ー。

今日は獄寺の日かースモーキンボムかーいやアニメではハリケーンボムだったっけ。

…というわけで珍しくオレは早く行った！

「イタリアに留学していた転校生の獄寺隼人君だ。」

んーあいつ出身地イタリアだったよなー? 留学じゃなくね? ツナを見てみるとちよっと考えて京子の方を向いてた。うむ、意味はない。

お? なんでオレを睨むんだい? あ、いやツナを睨んだのか。近いかなー。

「獄寺君の席はあそこ…獄寺君？」

こっちくんな獄寺隼人よ。

獄寺はガツとツナの机をおととつ、こっちまで被害来たぞ。  
というわけで獄寺の足を引っ掛けてやった。ニシシシッ。

とまあいろいろいやーつあって。

「あーゆーノリついていけないよな。」  
ふーん。

あ

「ツナ、前。」  
「え？ わっ」  
ドンッ

遅かったか…。

目の前にはやっぱり3年の不良が。

「おーいて。」

「骨折しちまったかも。」

「お前らの骨どんだけもろいんだよ。カルシウム取れやバカども。」  
「やべ、言っちゃった。そしてどんどん相手の態度が悪くなってくー。  
あ、ツナ逃げた。」

「牛乳買ってこいや！ じゃー！！」

オレはイベントを見たいがために振り切って上の階へいった。

めんどくせーから箇条書きにすんぜー。

? 獄寺がダイナマイト出してツナの方に抛ほうる。

? 銃弾でダイナマイトの先を切りリボン登場。

? ツナと獄寺のバトル開始！

? ツナ死ぬ気になって獄寺が放った2倍ボム、3倍ボムを「消す消す！！」で消す。

? ツナ、ファミリーに獄寺ゲット！

早えー。ツナすげー。

「ツナー、終わったかあ？」

「え、うん…って志希！ 何やってんの！」

「10代目！ あいつは誰ですか！」

「オレはツナの双子の姉だあー！！」

「え！ 10代目のお姉様!？」

「川中志希！ 志希と呼べ！ お姉様なんて呼ぶなよ！」

「は、はい！」

「敬語もなしだ！」

よし、獄寺と仲良くなること成功！

その日の夜、この世界に来て久しぶりに夢を見た。

次の朝の第一声が「ナツポー食いてー」。だった。多分あいつがいたのだろう。

あのなんか全発言が痛くてぜってーセリフとか考えてんだろってやつ。

スモーキン・ボム、来る！（後書き）

途中で獄寺君って書こうとしたら獄寺くんって出た。

…ワオ白蘭！

最近びゃっくんっていつちまつけど。

番外・さー今後どうなる？（前書き）

本編が書けないので番外書くって言う暴挙に出た。

少しネタばれ注意…って言うかこれ読んでる人ってだいたい先知ってるよな…。

番外・さー今後どうなる？

今日は獄寺が仲間になった。  
いやーすごいね。うん。

……………疲れたわ。  
マジ最悪。

「なー、今後この話どうなるんかなー。」  
「知るか。まだ一巻の話すら終わってねーんだぞ。」

ツッコミを入れたのはわが親友暁である。それにしてもオレの知り  
合い『キヨウ』多いな。（暁に京子に恭弥。一文字だとすべて『キ  
ヨウ』）

関係ないことを言っつていや書いている暇はないのである。そしても  
う一人日本人形みたいで実は怖「私のことでしょうか？滅しますよ  
？」…おー怖…。

今のは和である。第二の親友…いや同じくらいの親友である。2人  
とも親友である。しつこい

「お前さ、後半キャラ崩れてんぞ。」

「いやこれキャラじゃねーし。どっかの小説のナレーション+オレの感じたことを入れてるんだっつーの。」

「いらんわ。」

「ところでさー、こういう転生の話ってぜってーヴァリアー編とか仲間に入れられるんだよなー。」

「おもしろそうですよ?」

「オレ達の場合、何の守護者になるんかなー。」

「やっぱ天候関係してるよなー、ツナが上空で獄寺が嵐で山本が雨で了平が晴でランボが雷で雲雀が雲で骸とクロームが霧だったよな。」

「やはり雪とかでは?」

「あー…。」

「天候ってあんまないよな。」

「今気付いたんだけどさ、もしヴァリアー側に誰か1人が行ってツナ側に1人が行ったら、後の1人余るよな。」

「「あー…、確かに。」」

「オレスクアー口来たらヴァリアー側行きたい。」 志希

「オレはどっちでもいいけど。」 暁

「ってかさ、和って恭弥に止められるかもよ?」

「あるな。」

「そうなたら兄上に従います。」

「兄上…ってああ、雲雀か。」

「作者もこの話書いてなかったせいでオレ達3人がリボンキャラのことを何て呼んでるか忘れてるよな。」

「それ言っちゃ終わりだろ。」

「家にあるノートとかで書こうとはしてたけどな。」

「無謀ですね。」

「キャラの設定とか覚えてないんだぜ?バカだろ。」



「いや、勉強に関しては和よりもいいらしいぞ。テストで満点バンバン取ってたからな。」  
「すげーな…。」

番外・さー今後どうなる？（後書き）

ありがとうございましたー。

予想外の展開、来る！（前書き）

面倒くさくなったのでリボンから一気にはずしちゃおうかと。好きなマンガ入りたい…。

予想外の展開、来る！

朝。

目覚めはナツポー。

場所は真っ白い世界って最悪じゃね？

…え、なぜ今そういう事を思うのかって？

それはね、

今そういう状況だからだよ。(ドーン

なんだよこれ。またユウかよ。だいたいこういうときは暁も和も一緒だと思ってたのになんでオレしかいねーんだよ!!

『さつきから一人で愚痴愚痴言ってるじゃねーよ。』

「てめえのせいだコンチクショー！　なんで目覚めたら周りがこんななってるんだよ！」

『それは、この小説の作者が「神の世界はやっぱり真っ白だな」直前に思ったからだ。』

「何やってんだよ！」

『あ、なに？ ……え、マジ？』

なんか一人で言い始めやがったんで目線を見たらスケッチブック的なの。

…何？

「作者さんが面倒くさくなったらしいので、

リボン以外のところにも

ちよいちよい行ってみて下さい

by スタッフ」

「スタッフなんていたのかよ！！」

『おーナイスツツコミ。』

「うっせ」バコンっ！！

『…突然殴るのは卑きよ「卑怯なんて言葉は存在しねえ」横暴志希ちゃんめ』

「やめるキシヨイ」

『キシヨイの方がダメージ大きいんだよ知って「へー、ふーん、そうなんだあ 知らなかった！」…ムカついたんで殴っていいで「はあ？（冷笑）」すみませんでした。』

結果・オレの圧勝！！ やりー。神に勝つ一般人。

『ボソツ（超能力使えて神の世界に来れるのはもはや一般人じゃない…。』

「なんかぼそつと言ってるけど、ね・く・ら根暗に見えるから話しかけんのやーめよッ！……！」

神・すいません、オレ泣いていいですか？

作者・お前は弄られる運命なんだ　てかさつさとカンペのこと進めろよ。

『カンペっていつちやったよ…』と、まあいいや。』

「強がってんじゃねえよ。」

『うつせ。さっきのカンペの文字読んだなー？』

「ああ。『他の世界へちよくちよく行け』ってどういうことだ。」

『あー、それ、たぶん、「お前がどっかマンガの中で生きたい世界があつたらオレ呼んで行かしてくれる」とか言う大神の遊び心だ。…つたくじいちゃん達も勝手だなー。』

「大神って神の上か！　何人もいんのか！　そんでお前のじいちゃんかよ！」

『なんかエリートだぞオレは！』

「威張るな。で、今はどっか行かしてくれんのか？」

『まーな。どこがいい？　ただし、1回につき10日だ。もちろん、それ未満で帰ってきてもいい。もっといたくなったら延長してやる。』

今の状態みてえにその世界に住むってのもアリ。そうしたら学校とかはいろいろオレが何とかしてやる。どうだ？』

「んじゃあ『ONEPIECE』で。」

『あーワンプいな。分かった。どのあたりからがいい？設定も決められるが。』

「エースとの交流も欲しいしサボも…、交流したっつーことにしてゾロ初登場の島からで。設定はルフィの義理の姉18歳、実は『オルオルの実』だ！」

『…お前、前から考えてただろ？』

「ああ。ちなみに、オルオルの実とは『自分が能力者or能力を認識すればその実の能力を使える』！弱点は、『呪いの作用が大きく海の水がかかっただけでもふらふらになる（だがしばらくすれば戻る）』だ！」

『ふーん、分かった。他の設定はお前がいえばそんな通りになるから。じゃあ、今から送るぞ。』

「暁や和はどうすんだ？」

『ん？もちろん同じこと言っけど。』

「一緒に連れてこいよ。」

『めんどくさくて。』

「…まあいい、早く送れ。」

『んじゃ、送るぞ。』

すると、オレの体が光る。…見えねえ…。

頭が真っ白になる。

そして、その真っ白なところに色が入って来る。

完全に色がついたとき、オレは町の中にいた。



予想外の展開、来る！（後書き）

急展開過ぎてごめんなさい。  
後でタグ変更してきます。

予想外の展開、来る！2（前書き）

あけましておめでとうございます！！（遅いけど。）

さすがに正月は更新しなきゃいけないかなと。

大晦日って思いつきり夜更かしできる最高の日だよな。

今回も正月なんて関係ないけどな。

## 予想外の展開、来る！2

「おー……。あいつってちゃんと神だったんだな……。」

『ひでえ！』

……、

まわりからの視線が痛いと思ったら……、

「てめえのせいかこの野郎……！」

『グフツ……！』

アッパァ。

「ってか、なんでお前人間っぽくなってんだよ。」

こいつは今、金髪、白眼（イケメンだと思われ）、高身長でやせてる、右手首にミサंगा（キラキラしとる）という人間にしか見えな  
い格好だった（目立ってるけど）。神のときは全体的に白っぽい感  
じなんだが。

『いや、だって周りに姿見えないとおまえが変人に見「死ねっ！！」  
！』げふっ』

今度は腹を蹴ってやった。いっそ死ねばいいと思う。あ、こいつ神  
だった。チツ……。

『え、なにおまえ本当に俺が死ねばいいと思ってるの?』

「は? 当然だろ?(ポカン)」

『ひでえ……。』

「言葉かぶってる。」

『あ、はい、さーせん。「敬語を使えどアホ。「ごめんなさい。」』

「フーか漫才してるヒマねーんだよ。さっさとルフィ達探さねーといけねーんだからよ。」

『すいません。……………あ。やべ。』

不意に命が止まった。

「どっした、さっさと歩けよ。」

『……………怒らない?』

「ああ? なんだ。場所でも間違えたか?」

『……………正解。半分。』

「何? ……おまえほんと死ぬ。で、半分ってなんだよ。」

『時間も間違えた。ここ、多分フーシャ村だ。』



予想外の展開、来る！2（後書き）

会話文で全部埋めちゃだめですか。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5125q/>

---

3人の最強な子供、来る！！

2012年1月6日15時45分発行